

隠語とピジン語の発達過程に関する考察

Theories of the Process of Development for Jargon and Pidgin

岡村 徹

Toru Okamura

公立小松大学

Komatsu University

Abstract: The aim of this paper is to consider theories regarding the processes involved in the development of jargon and pidgin as viewed from the perspective of contrastive linguistics. This research focused on former lepers at a specific location in Japan i.e. the National Sanatorium in Kumamoto on the island of Kyushu in southern Japan. This community has developed a distinct way of communicating with each other in terms of jargon. The research also draws comparisons with the development of Pidgin languages especially Tok Pisin, the language spoken in Papua New Guinea. The socio-historical background of Tok Pisin is related to sugarcane in Western Samoa and Queensland. On the other hand, Pidgin English spoken in the Republic of Nauru is situated just south of the equator near Ocean Island and the language is largely based on China Coast Pidgin. In 1907, Chinese labourers were first imported in order to dig phosphate. After that each year approximately 1000 Chinese labourers worked on the island. The contracts were for three years, but they could renew their contracts. Their Pidgin English was brought to the island to communicate with Nauruan people in the stores, restaurants and workshops in phosphate mining. Over the years, it developed and changed and is still spoken today. The author would like to show that both jargon and pidgin involve semantic categories such as + solidarity, + productivity and – recordability. On the other hand, jargon can be distinguished from pidgin by ±concealment. Also the author found that the residents of the National Sanatorium in Kumamoto in southern Japan were and still are not willing to reveal their identity when using jargon, which the scholar Umegaki also pointed out in earlier research. Namely, the nature of group identity varies. The data comes from the author’s fieldwork which was conducted in 2008 at the aforementioned National Sanatorium in Kumamoto, and again in the same place in 2022 via a questionnaire survey.

Key words: Pidgin, jargon, contrastive linguistics, development process, semantic category

1. 序論

ピジン語の発達過程については、Todd (1986:127) が「ピジンからクレオールへ、それから恐らく標準英語へと進むこの円は、今のところ、まだ完全に描かれていない」と述べている

ように、その発達過程をめぐって、すべてが解明されているとは言えない。理論的には第1段階から第6段階までを Todd は想定している。すなわち、第1段階としての「限界的接触」、第2段階としての「土着化時代」、第3段階としての「優勢語からの影響」、第4段階としての「ポスト・クレオール連続体」、第5段階としての「黒人英語」、第6段階としての「標準語との完全な融合」である。このピジン語の発達過程について、Todd 以外の先行研究では、どのように議論されているかを、次の第2章で概観する。第3章では、まず、医療現場での隠語について一般的な特徴を述べ、続いて、熊本県にある国立療養所に対象を絞り、5人のインフォーマントと隠語との関わりについて、その細部を見ていく。第4章では、隠語の持つ通時的・共時的展開性、さらには、隠語の「隠匿性」、「生産性」、「記録性」、「連帯性」について、楳垣の言語観も交えながら分析する。

ピジン語は通常、母語話者を有さない類の言語だが、実は、隠語と呼ばれる言葉も、ピジン語との共通点がある。しかも、隠語の成立から残存または消滅に至る過程も、ピジン語のそれと類似する部分がある。そこには人類の基本的な言語行動の枠組みが存在するかのようでもある。

一見すると、ピジン語と隠語の成立過程は全く別物であると解釈されがちだが、実は人類言語に普遍的な発達過程がその両者にあると仮定して、論を進めていくことを本論文は目的とする。なお、隠語の用例は、筆者が2008年と2022年に熊本県の国立療養所で行ったフィールドワークに基づく。

2. 先行研究

ここではまず、ピジンとは何か、隠語とは何か、その定義に触れておきたい。まずピジンとは、「異なる言語を話す人々が意思疎通のために臨時にみだした簡易な音声言語コード (incipient pidgin) が慣習的体系として確立したもの」(三省堂言語学大辞典第6巻 1996:1104)とあり、筆者の立場も同じである。一方、隠語は、「ごく特殊なサークル、泥棒仲間とか秘密結社の合言葉のような、むしろ部外の者には理解されないように変形した言葉を使って、仲間意識を強める言い方」(三省堂言語学大辞典第6巻 1996:365)を指す。これに加えて、町田(2001:160-161)は、隠語の言葉遊びとしての側面にも触れている。さらに、台湾のアタヤル族の言語使用を調査した簡によると、日本語という言語そのものが隠語としての役割を果たすこともあるという(簡 2002 in 真田 2006:32)。

隠語もピジンとよく似ていて、はじめは集団内で、それぞれが知っているあらゆる語彙素材が投入され、その語彙を使用するのにふさわしい適切な場面で、何度も使用を重ねていくうち

に、当該集団内の共通コードとして固定化する。

細川（1992:1104）は、社会言語学的に厳密な意味でのピジンとは、次のようなものであるという。

1. いずれの話し手の母語でもない。
2. 使用する場面、用途、相手が限定されている。
3. 対面的な口頭でのコミュニケーションに用いられる。
4. そのピジン以外に通じる言語がない。
5. ごく短期間で習得が可能である。

上記1の「いずれの話し手の母語でもない」というピジンの特徴を、「隠語はもともと当該集団内に存在しなかった語彙である」とこと結びつけることは一見理解しにくいことのように思えるが、新しい集団の発生に伴う新しい表現形式の発生という類似点の指摘であれば、あるいは可能かもしれない。その集団を構成するどの構成員の既知情報でもなかった。

次に上記2だが、隠語もまた、その使用場面、用途、相手が限定されている。例えば、‘白うさぎ’（防護服をまとった看護婦のこと）という隠語なら、患者（または回復者）どうしで、積極的に使われたであろう。防護服を着た医療関係者が自分たちのことを‘白うさぎ’とは言わないであろう。

ピジン語と隠語の比較対照は、一見すると、比較する基盤の異なるものどうしの比較に思える。なぜならば、ピジンは言語体系全体のことを指すのに対して、集団語は通常語彙の一部を構成するものだからである。柴田（1965:46）も指摘するように「方言は生まれてすぐ覚えることばですが、集団語は方言を覚えた上で覚えることばです。方言が第一次の言語ならば、集団語は第二次の言語です」という、自然に獲得されるかいなかという側面から両者の異なりが見えるが、それぞれの発達過程に関しては、人類言語の拡大を考えるうえで、決して比較することが無意味ではなく、むしろ、新しい表現形式の発生という視座から見ると、比較する意義は大きいといえるであろう。

事実、Jespersen(1922:234)は、‘I would point the contrast between these makeshift languages and slang’としており、ピジンとスラングの対照的な特徴について言及しており、本研究に通じるものがある。また、本論文でも後述するが、榎垣(1966:474)では、「特殊な社会集団では、隠語が共通語のような役目をはたしていた」として「その場合の隠語は言語統一の手段に利用されたのである」と指摘しているように、隠語とピジンとの比較にあたり本論文でも重要な観点である。定延（2016:210）にも類似の指摘がある。

Bickerton（1985:7）は、世界のピジンやクレオールを比較し、バイオプログラム

理論を提唱した研究者である。上記のToddが述べた、第3段階と第4段階の違いについては、Bickertonが豊富な用例を提供している。Bickerton は、「クレオール化の起こる直前には、発達したピジンというより、「混合語 (jargon)」あるいは「ピジン前連続体 (pre-pidgin continuum)」と、ときおり言われるような、非常に変動的で極度に未発達な言語状況が、ハワイにおけると同様、それぞれにおいて存在したものと推測できる」と述べているが、具体的には、例えば、Bickerton (1985:14-15) は、「HPEのフィリピン人話者は、ほとんどの名詞主語と動詞との間に、代名詞を挿入したが、日本人話者は、めったにこの構造を用いなかったと報告している」と述べている。ところが、Bickerton (1985: 18) は、クレオールの域に達すると、「現代HCEの均質性は、集団間の相違が集団内の接触を通して徐々に取り除かれるといった水平化過程によって生じたものであるに違いない」と言及しているように、これだけでも、上記の第3段階と第4段階を区別する理由がある。

Mühlhäusler (1996:194) が、拡大ピジンとクレオールの形態論的な相違を、Tok Pisinを通して明確にしている。その結果、後者においては、前者におけるほど、redundancy (余剰性)が見られないとした。これは Bickerton も指摘しており、クレオールの域に達すると、構造的に均質になることを示唆している。やはり、Todd のいうところの第3段階と第4段階とはその発達過程において、明確に区別する根拠がある。

細川 (1992:144) も、発達段階における諸様態を認める研究者である。つまり、「ジャーゴン→ピジン→クレオール」といった通時的連続相において、ピジンは初期ピジンと拡大ピジンとに分ける根拠があるとする。その拡大ピジンが広域で使用されると、母語化が始まるとする。

千田 (2022:25) は、クレオールの言語特徴を通して、プロトタイプの定義を考える McWhorter の研究を取り上げている。それは最もクレオールらしいクレオールからそうでないものまで、実際には様々な段階があるという内容である。この点は Bickerton も類似の指摘をしているが、ピジンとクレオールという概念上の異なりを区別する一助にはなると考える。ただ、千田が「トク・ピシンにも母語話者がいることはよく知られている。こうした、ある人にとっては母語であるが、第二言語話者が相当な比重を占める言語が「ピジン」なのか、「クレオール」なのか、非母語話者には「ピジン」で母語話者には「クレオール」なのだとしたらそれは違う言語なのか」という指摘は最もなことである。これは母語話者をめぐる問題であるが、言語の発達過程を議論する際、言語の構造的側面を判断基準の一つとして捉えた場合、言語の名称の問題はとりあえず克服できるのかもしれない。

3. 熊本調査再考

先の先行研究の紹介のところで、細川 (1992:444) のピジン・クレオールの発達段階をめぐ

る考えを紹介した。その細川は、本論文との関連で、重要な指摘を行っている。

オーストラリア先住民（アボリジニー）の場合、英語語彙系クリオール（ないし、類クリオール）を使用するようになったことは、侵略者の言語である英語への屈服であるよりも、むしろ、アボリジニー同士では通じるが「白人」を排除しようような言語コードを確保するという意味があった（大多数の非アボリジニー系オーストラリア人は、クリオール語を聴いてもまったく理解できない）。

クレオール語が、「アボリジニー同士では通じるが「白人」を排除しようような言語コードを確保するという意味があった」との指摘は、まさに隠語が持つ性質に近いと考えられる。Todd が言及した、発達段階に照らし合わせて言うと、第2段階で基層言語からの語彙の流入が始まるが、このときすでに非アボリジニー系の話者が聞いても理解できない言語的世界の構築が始まっているといえよう。そして、第3段階においても、アボリジニー系話者にとっては都合の良い、音的、文法的な仕組みを、非アボリジニー系話者の言語から流入してくる語彙に対して、当てはめるため、その結果、非アボリジニー系話者が当該言語を聞いてもわからないのである。

3.1 医療現場の隠語

一方、かつては隠語であったが、今では一般によく知られている「オベ」という言葉は、昔、患者に知られないように医師と看護師との間で、使用されていた。これは手術が必要な患者に対して、余計な不安や心配をかけさせたくないという配慮から生まれた隠語であると思われる。もちろん今日では、「オベ」という言葉は世間に浸透したため、隠語としての性格を有していない。同様に、「ヴァゼクトミー」（男性の断種手術のこと）という言葉も、当初は患者に知られていなかったが、現在では多くの入所者によって把握されている言葉の一つである。日本語百科事典（1988: 347）によると、カタカナで表記されるものには、「これらのことばが、限定された世界や分野のものであることを示す効果がある」としている。実際、医療コミュニケーションのあり方を研究した吉岡（2011:112）らによると、ガン末期の対処場面など、患者の側からは、平易でわかりやすい表現や外来語を使って、新しい医療概念の説明を望んでいることが明らかになった。

江藤ほか（2002:32）によると、隠語が持つ排他性について、「医療職に携わる自己のアイデンティティーを再確認することや、先輩から後輩へと隠語が伝えられることから帰属意識を深め、またその医療機関コミュニティ内の仲間意識や連帯感を強める目的もある」とする。このように隠語は、時間の経過とともに、複数の要因が絡まって、隠語としての性質が失われて

いく。‘ヴァゼクトミー’は、医療側から発せられた言葉だが、他にも‘壮健らい’と言う言葉がある。これは、ハンセン病としての認定を受けていない入所者のことを指し、ハンセン病によって、家族がバラバラになることを回避したい切実な願いから、患者と一緒に入所する、あるいは経済的に生活が苦しく、やむを得ず一緒に入所する人もいたようである。

臨床現場における外来語・略語・隠語の使用状況と看護師の認識を調査した、桐田（2007: 611）らは、看護師間のコミュニケーションを円滑にし、医療事故を防ぐために、用語集を作成した。その中で、使用理由に関して、「対象者に意味を理解されないため」が36.5%であったことを報告している。ただ、桐田らの研究は、外来語、略語、隠語を総合的に捉えた研究なので、「隠語」だけを取り上げて、その使用理由を被験者に尋ねれば、上記の使用理由が実際にはもっと高い割合となって表れたに違いない。興味深いのは、その使用場面についてである。桐田（2007:611）らの報告によると、「申し送り」、「処置中」、「記録」の場面順に、使用率が高い。背景として、看護師業務の多忙を挙げている。このうち、隠匿性が高い場面は、「処置中」の場面になると思われる。なぜならば、治療中に、患者に不必要な不安を与えるべきではないからである。また、看護師が理解困難な用語として、「ステル」（死亡する）、「タキル」（頻脈になる）、「SAH」（クモ膜下出血）、「ケモ」（化学療法薬）、「ゼク」（死体解剖）などを挙げている。これらの用語は、「患者等に動揺や恐怖心を抱かせる恐れの高いもの」（桐田 2007: 614）としている。江藤（2002:35）らも、「患者のプライバシーに関わることは隠語を使用するのが秘密保持には一番である」と述べる¹。そういう意味においては、「ヴァゼクトミー」という隠語が持つ性質に近いと言えるだろう。

逆に、患者あるいは回復者の側から使用されたと思われる隠語もある。例えば、「白うさぎ」がその好例である。これは、防護服を着て患者のケアをしていた看護師の姿が、兎に似ていたところから、そのように用いられたが、一種の比喩語と言えよう。他にも、療養所内で飲酒が禁止されていた頃、患者らはお酒のことを、「つる」や「かめ」と呼んでいた。園内の規則を破ると、監禁室に入れられ、粗末な食事しか与えられなかったことが背景としてある。「ぜんざい」は‘結婚’を意味する。この隠語の成立の背景も、‘つる’や‘かめ’の場合と類似しており、昔園内では結婚が禁止されていた時代があった。このように療養所の隠語は品詞論的に言うと、名詞が圧倒的に多い。これは、隠語辞典を編集した榎垣（1956:507）も述べている。

隠語の発達段階について、医療者の側からにせよ患者（または回復者）の側からにせよ、一旦成立した隠語は、時間の経過とともにその隠語としての意味合いが希薄になっていく。これ

¹ 江藤（2002: 37）らは、公的なカルテなどにも使用される隠語について、「病院から地域への連絡（症例の引継ぎ）の際にも使われやすいので、隠語だということを十分に認識していないと、引き継ぐ先の保健婦に意味がわからないという問題もある」とし、隠語の使用についての議論が必要だとしている。

はピジンがクレオール化するのによく似ている。もう少し細部を観察してみよう。まず、‘つる’や‘かめ’だが、医療従事者と患者（または回復者）の共通の知識としては、‘酒’がある。その‘酒’という言葉そのまま園内で用いると、罰則の対象になることから、当該隠語が浮かび上がったと思われる。当初は‘つる’や‘かめ’の他にも、隠語となる候補があったであろう。そういう意味においては、ジャーゴンに似ている。つまり当初はまだ集団語としての資格を有しておらず、個人レベルもしくは小規模なグループの間で用いられたかもしれない。次に、その隠語の使用範囲を広げていき、集団語としての領域に到達したと考えられる。これはピジンの発達段階になぞらえると、初期ピジンから拡大ピジンの領域に相当するであろう。患者（または回復者）の側で、多くの使用者を獲得する状況は、まさにクレオール化の過程に類似している。それがやがて、隠語としての性格が失われ、一般の人にも認知されていくわけだが、この段階は、いわゆる脱クレオール化に相当すると言えそうである。

次に、細川（1992: 444）のクレオールについての考察を見てみよう。

これは、もともと数多くの多様な諸言語に分化していたアボリジニー諸集団を（英語以外の言語によって）言語的に統一する、という言語戦略であると同時に、個別「部族」から「アボリジニー」へ、というアイデンティティーの再編・統合に対応したものであった。その意味では、クリオール言語（特に、北オーストラリア・クリオール）の確立は、少なからぬ先住民個別言語の衰退を早める結果となった。

上記の「個別「部族」」から「アボリジニー」へ、というアイデンティティーの再編・統合に対応したもの」という箇所も、ピジンの発達段階に照らして考えると興味深い。療養所の入所者については、岡村（2008）の研究にもあるように、全国からの入所があるのが実態である。そのような状況のなかでも、菊池恵楓園は肥筑方言話者を中核とした言語的世界が形成されていると述べた。これは、菊池恵楓園自治会の機関誌『菊池野』等の分析を通じて明らかにしたものであった。このことは、後に当該機関誌に入所者の出身地分布表が掲載されたが、その一覧表によっても実証されることとなった。‘かごぬけ’（ある療養所を無断で抜け出し他の療養所に潜り込むこと）という隠語が示すように、入所者が園内で不品行を働いた場合、当園におられなくなり、別の療養所に移ることもあった。つまり、療養所が熊本にあるから、熊本を中心とした入所者がいるとは限らなかった。加えて、入所者は家族や親戚に迷惑がかかることを恐れて、出身を明らかにしない、あるいは、偽名を使う時代があった。今日でも一部散見される。同じような境遇の者どうし、共通の隠語を通じてアイデンティティーが確立されたことは容易に想像できる。

また、ピジンは必ずしもクレオール化するわけではない。つまり、消滅したピジンは、人類

史上数多くあった。いくつか例を挙げると、豪州のカナカ英語、ニュージーランドのマオリ・ピジン英語などがある。消滅に至る要因について、岡村（2021）は居住環境、政治的・経済的要因、社会的要因、マスメディアなどといった要因が階層を成していると述べたが、隠語の場合も、永遠に存続するわけではないという点は共通している。

3.2 国立療養所入所者と隠語

それではここで、2022年4月に筆者が調査した、隠語の実態を見てみたい²。なお、表中の数字は、以下の意味である。

1=よく使う・2=耳にするが自分は使わない・3=聞いたことがない・4=昔よく使うか、耳にするかした

表1 国立療養所入所者と隠語

	K70男1	K70男2	K80男	K80女1	K80女2
ヴァゼクトミー	2	2	2	3	4
檜山行き	2	4	2	3	4
白うさぎ	2	-	2	3	2
つる	2	3	2	3	4
かめ	2	3	2	3	4
ぜんざいをする	2	2	1	1	4
のどきり三年	2	4	1	2	4
かごぬけ	2	3	2	3	4
ちょうちん	2	3	3	3	4
少年舎出	2	4	2	3	2
すじ切り	2	2	1	2	4
ひだり盲腸	2	4	2	2	4
お召し列車	2	4	1	2	1
草津送り	2	4	2	3	4
けこみ	2	3	2	3	4
どんぐり拾い	2	3	2	3	4
壮健らい	2	4	1	2	4
黒石の豚行き	3	3	3	3	4
座敷豚	2	4	2	3	4
苗床ん人	3	3	2	3	4
河向う	3	4	2	3	2

² 筆者はこれまで、熊本県にある、国立療養所菊池恵楓園に何度も調査に向かう機会があった。しかしながら今回は、コロナ禍ということもあり、入園がかなわず、アンケートを郵送するという形をとった。毎回、入所者自治会機関誌『菊池野』をお送りいただき、'隠語'を収集してきた。以前、恵楓園自治会を訪れた際、故杉野芳武様からも多くの隠語をお教えいただいた。その際は、自治会の皆様や当時副園長をしておられた野上玲子様、さらには看護師の皆様方からもご協力いただき大変お世話になった。その成果を発表する前には、杉野芳武様に一度目を通していただき、修正のうえ、『帝塚山学院大学研究論集』（2008年）に掲載することができた。そして今回は、上記機関誌の編集長をしておられる、杉野佳子様をはじめ、男性3名、女性2名から、アンケートへのご協力をいただいた。本来なら、筆者が恵楓園を訪問し、皆様に直接お尋ねすべきところであったが、コロナ禍にあり、様々な制限も依然として続いており、断念せざるを得なかった。しかし、郵送という形式でも、調査が十分可能だと思い、ご協力いただいた次第である。ここに改めて感謝を申し上げたい。最後に、本稿を世に出す前に、杉野佳子様にご目を通していただいたことを付記しておきたい。筆者の認識が不十分な箇所について、ご教示いただいた。

いくつか気がつくことがある。まず、被験者5名の入所歴は全員が50年以上になり、平均は62年である。入所歴が長く、同じ療養所においても、隠語の理解度に差がある。上記21の隠語のうち、一番理解度の高い語彙は、「ぜんざいをする」と「お召し列車」である。「お召し列車」は、患者専用の列車のことを指すが、当初、「伝染病患者輸送中」という札が車両に貼られたこともあったという。これは患者の気持ちを大いに傷つけたようである。入所者の記憶からなかなか消し去ることのできる言葉ではなかろう。一方、「ぜんざいをする」は、患者または回復者が、療養所内で一般世間並みに結婚し、子どもを作ることには種々の制限が課されていたことが背景としてある。そのことを公に口にできなかつたため、発生した隠語であると考えられる。患者または回復者が、療養所内で、どう生きていくか、といった帰属意識にかかわる問題でもあったため、やはり入所者の記憶に深く刻まれる隠語として位置づけられるのであろう。‘療養所’という同じ生活体験の場と価値観を共有する集団として発生した隠語は、数多い。

逆に、理解度の低い語彙は、「ちょうちん」と「黒石の豚行き」と「苗床ん人」である。「苗床ん人」に対する言葉は、「社会の人」であり、療養所の外の世界に暮らす人のことを指す。つまり、「苗床ん人」は、どちらかと言うと、療養所の外の世界の人が、療養所内に暮らす入所者のことを呼んだ言葉であるため、そのように呼ばれる側の理解度が低くなるのであろう。同じことが、「社会の人」という言葉にも言える。つまり、療養所の外に暮らす人は、入所者によって、自分たちが「社会の人」と呼ばれていることを知る人は少ないかもしれない。療養所の内に暮らす人たちは、‘社会の人’ではなく、特別な存在としての認識を持つ。同じことが、「黒石の豚行き」という言葉にも当てはまる。つまり、この言葉は療養所の外の世界に暮らす人から、療養所内に暮らす人に向けられた言葉である。熊本の市場では、恵楓園への納入業者たちが、悪い品物を指して、このように言っていたようである。

二つ目に、隠語の理解度における男女差について言及しておきたい。今回の対象となった隠語は全部で21あるが、そのうち、「3=聞いたことがない」に一番多くチェックをした被験者は「K80女1」である。しかし、これをもって直ちに、隠語が男性世界と結びついているとは言えない。なぜならば、「K80女2」は調査対象となったすべての隠語を理解しているからである。男性においても、「K70男2」は他の男性よりも、隠語の理解度は低く、どちらかと言うと、「K80女1」の結果に近い。したがって、明確に男女差があるとは言えない。「つる」や「かめ」など、8項目の理解度に一致が見られるものの、「ヴァゼクトミー」や「少年舎出」など6項目が不一致となっている。後者の二つの隠語は、男性世界に言及したものであるため、不一致が生じたのかもしれない。前者の二つの隠語は、もしお酒を嗜まない人であったならば、男女に関係なく、当該隠語への関心も低かつたであろう³。

三つ目に、「4=昔よく使うか、耳にするかした」に最も多くチェックをしている被験者は、「K80女2」である。当該被験者がチェックした隠語を、「K70男2」のそれと比較すると、一つの特

徴が浮かび上がってくる。特に、その「4」の分布において、「槍山行き」と「草津送り」などが共通している。‘槍山’は、昔園内の中にあった火葬場のことを指す。今日では、‘泗水に行かないと治らない’（泗水町の火葬場に行くため）と言うようである⁴。つまり、‘槍山’は現在では存在しないため、当該被験者の二人とも、「4」を付けたものと思われる。同じことが、「草津送り」にも言える。昔、園内の規則を犯し、群馬県草津の重監房に送られたら生きて帰れる保証がなかったことから、このような表現が生まれたが、現在ではこうしたことはないため、「4」がマークされたと考える。「K80女2」によると、「反抗的な事を言うと、草津で頭を冷やしてくれるか」と耳にしたことがあるようである。

最後に、今回は深入りできないが、隠語の伝播について考察する必要がある。被験者の中に、岡山の国立療養所への入所経験がある者が3名いるためである。優秀な入所者が選抜され、岡山県にある当該療養所の新良田教室で学ぶというものだが、そこで人との接触があり、隠語が伝播した可能性がある。岡山の療養所で、同様の調査を行えば、隠語の伝播について、その一端を知ることができるかもしれない。上記の「泗水」という言葉は、他の療養所では聞くことが出来ないだろう。その集団固有の言葉としての性格が強いと思われる。

一方、「草津送り」については、他の療養所でも、そうした歴史があったならば、熊本の療養所と同じように使われていた可能性が残る。

4. 分析

ここでひとまず、これまでの議論を整理しておきたい。まず、ピジンは、歴史的には通過点であって、ピジン化する前の状態と、クレオール化する可能性を備えているという意味において、「通時的展開性」を有すると言えるだろう。これはある意味、自然言語の世界も同じことが言えるが、ピジンからクレオールへの拡大の過程は、しばしばその言語生態的な環境が自然言語と異なるかもしれない。隠語もまた、隠語が成立する前の状態と、隠語が隠語としての性質を失う状態の二つの異なる時期があるという意味において、「通時的展開性」を有すると言えるだろう。これは何も隠語に限った話ではない。例えば、流行語においても、流行語が成立する前の状態と、流行語が流行語としての性質を失う状態の二つの異なる時期があるという意味において、隠語と同様、通時的展開性があるといえよう。

ピジンの「共時的展開性」については、ピジンをどう定義するかにもよるが、先の伝統的な定義に基づいて考える場合、その性質は決して強いとは言えないだろう。ただ、ニューギニア

³ 被験者「K80女2」より、「昭和40年頃まで、男性の寮で‘どぶろく’を作っていた」とご教示いただいた。

⁴ 同じく、被験者「K80女2」より、ご教示いただいた。

のトク・ピシンのように、ピジンと呼ばれる言語であっても、一部クレオール化が進行し、地域的・社会的変種の存在が認められている以上、その性質がないとは言い切れない。つまり、ピジン語のどの状態に対象を絞るか、あるいはどの地域で話されているピジン語に光を当てるかによって、解釈が異なってくるのである。本論文では、先に取り上げた、ピジンの伝統的な定義に沿って解釈し、「共時的展開性」という性質は、弱いと判断する。隠語もまた、その性質は弱く、療養所という空間内で、それが拡大することはあっても、全国の療養所にまで浸透するかは疑問である。デパート業界における万引常習者が来店した際など、「ただいま川中さんが来ています」⁵というアナウンスを店内に流すことはあっても、その記号の様式はデパートによって異なるのと同じことである。

4.1 隠語の隠匿性

隠語の「隠匿性」については、言うまでもなく、その性質は強い。そうでなければ隠語とは言わない。しかしその隠語も、時間の経過とともに、その性質が徐々に弱くなっていく。一方、ピジン語は、先のアボリジニーのピジン語のように、隠匿性があるものの、これは言語社会によって、その性質は異なって来るものと思われる。豪州のクイーンズランドの砂糖黍農園で成立したピジン英語も、ピジン語の発達段階における第2段階として、メラネシア系の言語からの語彙の流入があった際、あるいは、英語を話す白人らにわからないような隠語的な性質を持つコミュニケーション場面もあったかもしれないが、本来は、隠匿する必要がないものである。このピジン語は白人とメラネシア人とを結ぶコミュニケーションのための道具でもあった。例えば、ナウル共和国で話されているピジン英語は、島内のレストランや商店などで、ナウル人と中国人とを結ぶ非常に重要なコミュニケーションのための道具である。したがって、ピジン語の「隠匿性」は、本論文では‘弱い’と判断する。

表2 隠語とピジンの比較

	ピジン	クレオール	隠語	非隠語
通時的展開性	+	+	+	+
共時的展開性	-	-	-	+
隠 匿 性	-	-	+	+
生 産 性	+	-	+	+
記 録 性	-	+	-	+
連 帯 性	+	+	+	-

⁵ 橋内 (1986:171) より引用。

ピジン語の発生は、言語環境さえ整えば、いくらでも成立する。それは歴史が証明している。特に、19世紀におけるオセアニア分割競争において、欧州語（英語、ドイツ語、オランダ語、フランス語、スペイン語など）話者と現地語との間で、接触言語が次々に成立していった。人類の誕生から、歴史的に繰り返され、ある言語はピジン化およびクレオール化し、またある言語は消滅をし、今日に至っている。また、ピジン化は、ニューギニアのヒリ・モツ語のように必ずしも欧州語との接触によらない言語もあることに注意が必要である。これらのことから、ピジンの「生産性」は高く、環境が整えば、いくらでも言語のピジン化は起こると判断される。なお、ここでいう「生産性」とは形態論のレベルで意味を区別するために語彙を拡大していく過程を指す。例えば、ニューギニアのピジン語 *pis* は英語の *peace* に由来するが、それを重複させて‘放尿する’ *pispis* を作った。隠語もまた、「生産性」が極めて高い。病院、デパート業界、航空業界、広告業界、警察関係、風俗業界、テレビ業界、音楽業界など、枚挙にいとまがない。なお、ここでいう「生産性」とは、既存の語彙があるにもかかわらず、それを秘密保持のために特定の成員にのみ情報を共有するために、新たに作り出すことをいう。例えば、デパート業界における‘万引常習者’は‘川中さん’に置き換えられる。

ピジン語の中には、新聞や聖書や広告等の媒体において、活字になっているものもあるが、そういった「記録性」の高いピジン語はまれであろう。ナウル共和国のピジン英語は、成立してから1世紀を超えるが、限定的な使われ方しかされてこなかったのに加え、ピジンの社会的な威信が低いことが理由となって、いまだに文字を持たない。

隠語もまた、「記録性」が低いと言わざるを得ない。おそらく当初は、口頭でのみ使用されたであろう。それが、特定の業界で、約束事として情報を共有する必要性が生じたならば、簡単なメモやノートに記録することはあったかもしれない。そういった場合、一定の期間が経過すれば、中身を変更していったであろう。少なくとも、隠語が常にオープンに記録されるものではなかつたろう。『隠語辞典』は、刊行された時点で、今まで隠語としての性格が強かった語彙であっても、希薄化する。もちろん、辞典に取り上げられている隠語が、多くのひとによって共有されなければ、隠語としての性格をそのまま有することになる。

最後に、「連帯性」について、これはピジン語も隠語も強いと言える。ピジン語は、その伝統的な定義に即して考えるならば、互いが何とかコミュニケーションをとるために、自然と発生するわけだから、そもそも連帯性がなければ、ピジン化は起きない。カナカ英語の話者は、砂糖黍農園の契約労働者としてのアイデンティティーまたは連帯性を、ピジン英語を通じて確立していった。隠語もまた、特定の社会集団内では、隠語を通じて、同じ職場で働く従業員としてのアイデンティティーまたは連帯性を強めていったものと思われる。友成（2006: 9）は、米川（2001）を引用し、若者言葉と隠語の共通点について触れ、「隠語というのは、集団語の中で、特に集団外の者にわからなくさせるような働きをすることばで、副次的に集団内の連帯

を深める効果ももたらす」とする。医療現場についても同じことが言えるであろう。

ポライトネス理論の考え方を援用すると「連帯性」は、ブラウンとレビンソンが言うところの、ポジティブ・ポライトネスの中のストラテジー4、‘仲間内アイデンティティマーカ―’と大いに関係があると言えよう。ブラウンとレビンソン（2011:144-151）も、‘仲間うちであることを示す標識を用いよ’の中で、「仲間内での隠語の使用」をここに含めており、他にも「呼びかけ表現」、「仲間言葉や方言」、「スラング」、「言葉の省略」が対象となっている。

4.2 楳垣の言語観と今回のデータ

ところで、楳垣（1956:466）は、隠語の性格について、「実際の社会生活では、いつも公式の言葉ばかりを使っていたのでは、固苦しすぎて窮屈だから時には砕けた言葉でざっくばらんに話して息抜きをしてみたい。そういう気持ちにぴったりと合った言葉、それが隠語である」と述べている。筆者が恵楓園で収集した、「豆でも食う会」（‘患者自治会’、後に‘入所者自治会’のことを指す）はまさにその好例であろう。‘自治会’という言葉には、人によっては挑発的な響きがある。そのような時に、「豆でも食う会」と仲間どうしで表現することによって、部外者にはもちろん、その会が何をするとところかわからないばかりでなく、仲間内どうしで、緊張関係を和らげるプラスの効果もあったであろう。パプアニューギニアのトク・ピシン（ピジン英語）の語彙層のうち、約10%前後が、在来の言語から語彙供給がなされている。主にオーストロネシア系の言語であるトライ語からのものであるが、トライ族にとっては、自分たちの母語から供給された語彙に触れることは‘息抜き’になるであろうか。

「時には砕けた言葉で」という意味においては、療養所で使われた、「どんぐり拾い」（男女の性関係そのものを指す）も同様の性格を有していると思われる。加えて、カムフラージュとしての性格も有していると言えようか。他にも、‘お召し列車’（患者専用の列車のこと）という言葉にもカムフラージュの働きがあると言えよう。当初は、「伝染病患者輸送中」といった札が車両にかけられていたこともあったようである。

また、楳垣（1956:467）は、わらじ（牛肉のこと）について、「肉食を禁じられていた坊さん達の間で生れた隠語」とし、「やり切れぬ現実の息抜きをし、戒律を風刺し、ひそかに不満のはげ口を見出したのだらう」としている。このような気持ちは、入所者にもおそらくあったであろう。例えば、園内では、酒や焼酎を飲むことが禁じられていた時代があったことは先に述べた。それを別の言葉「つる」や「かめ」に置き換えて、不満のはげ口を見出したであろうことは容易に想像できる。また、あからさまに言うことを回避する、つまり、秘密を保持する必要性から生まれた隠語とも言える。このような背景があって、当該隠語が栄えていったと思われる。

さらに、楳垣は、隠語には、「その複雑な内容を、一語でずばりと表現し、その内容を的確

に伝えている点が隠語の大きな特徴だ」と述べるが、これについても恵楓園で収集した資料に同様の例が散見される。例えば、「草津送り」がその好例であろう。園内の規則を犯し、群馬県草津の重監房に送られたら生きて帰れる保証がなかったという事実があったが、そのことを名詞と動詞との複合語でもって簡潔に表現している。また、「ちょうちん」（いつも動いてバランスをとっている様）は、両手両足が萎えて（垂手垂足）何かに掴まらなければ、立って静止することもできないため、いつも動いてバランスをとっている様をいう。これを「ちょうちん」という一語で簡潔に表現した。

トク・ピシンの Sais o nogat?（抱いてもいいか）における sais は英語の size に由来するが、例えば「誰かの体の大きさ・寸法に合わせて服を作る」、つまり、今選んでいる服のサイズが当人に合うかどうか、という意味から、「服」と「体」との密着を意味するようになり、そこから現在の意味が生まれたようである。人前であからさまには言いにくいことを表現するために生まれた言葉のようである（岡村 2005:153）。

最後に、楳垣（1956:468）は、「隠語には多少の誇張が付きものだから、暴露的にもなり、人前でいえない言葉も多く、その表わす意味が少々どぎつい場合が多い」とする。筆者が恵楓園で収集した、「黒石（恵楓園の別称）の豚行き」（熊本の市場では、恵楓園への納入業者たちが、悪い品物を指して、このように言っていた）や「ヴァゼクトミー」（男性の断種手術のこと）はその好例であろう。「ヴァゼクトミー」については、借用語で表現することにより、精神的負担を軽減する意図もあったと思われる。西尾（2005:278）も、秘密保持の機能を持った隠語として、また、職業語としての性格を有する「エンジェルセット」（死化粧を施す道具や脱脂綿等をまとめて収納した箱のこと）を挙げている。このようにして見ると、恵楓園で収集した用例は、楳垣が隠語の性格として言及したものから逸脱はしないように思われる。また、楳垣（1956:468）は、「隠語は伝播力が強いのに反して持続力が弱い」とも述べているが、アンケートの結果はまさにそのことを表しているように思える。借用語という点においては、ニューギニアのトク・ピシンも同様である。ドイツ語から借用した、yu raus!（出て行け）がある。ただ、「ヴァゼクトミー」のように、精神的負担を軽減する働きはない。

楳垣（1956:469）は、「その連中が適切な言葉を考え出して、仲間のいいたいと思いがいい得なかった気持を、ずばりと小気味よく表現すると、（中略）たちまち仲間の絶対的な支持を受けて、全員に採用され、隠語として成立し、その集団に根を張ってしまう」とあるが、筆者が収集した、「少年舎出」（頭でっかちで大人びた人、子どもらしさがない）が当てはまるように思われる。若くして入所した元患者は、年齢が若いにもかかわらず、言うことだけは一人前なので、このような言葉が使われた。このような隠語も、隠語が生まれる理由の一つと言えるだろう。

トク・ピシンの haus pekpek（用便をするための家→トイレ）、haus lotu（祈るための家→

教会), *haus kaikai* (食べるための家→レストラン)などは、隠語ではないが、既存の語彙と語彙を組み合わせて作った複合語であるという点において、隠語の構成と類似する部分がある。これは、ピジン語が語彙を拡大していく過程に見られる現象であるが、隠語にも同様の過程が見られる。樋口(1935:9)によると、隠語の構成様式について、「理論的方法によるもの」と「連想作用によるもの」と大きく二種類に分けているが、上記トク・ピシンの用例(*Sais onogat?*)などは、両方の構成様式、すなわち、音節の添加と謎的様式の二つを有するようになっている⁶。なお、樋口(1935:9)には、謎的様式として、「月賦」→「ゲップ」→「ラムネ」等の用例が挙げられている。

第二の理由として榎垣は、「仲間であるという意識を強めたい気持、言葉によって同志であることを確認したい気持」を取り上げている。恵楓園の入所者の場合は、過去における共通の病とのたたかい、共通の歴史体験等が、仲間としてのアイデンティティーを強めて行ったと思われる。アンケートの結果を見ると、様々な隠語があるにもかかわらず、多くの協力者がほぼ同様の隠語に関する知識を有しているところから、国立療養所の入所者の言葉という集団語の中に、共通の語彙体系が存在したものと推測できる。一つひとつの隠語は、当該集団内のアイデンティティーを強める働きがあったであろう。しかし、榎垣(1956:470)には、子ども達の仲間、学生の仲間をめぐって、「特定の社会集団に属していることを、進んで示したい、お互いに認め合い、他人からも認められたいという気持ちを強く持っている」とするが、果たして国立療養所にも当てはまるだろうか。園内では、偽名を使い、家族や親戚にも自分たちの存在を隠し続けてきた入所者にとっては、「進んで示したい」ということは必ずしも当てはまらないであろう。集団がもつ性格によるのであって、どのような集団語にも榎垣が述べるようなことが当てはまるわけではない。

トク・ピシンの話者、特にメラネシア系の話者にとっては、在来言語から供給された語彙に対して、たとえ、それが自分たちの母語の単語と語形が異なっても、同じオーストロネシア系の言語、あるいはパプア系の言語であるという大まかな意味においてのアイデンティティーは言葉を通じて確立される。ただし、パプア諸語については、非オーストロネシア諸語ということであって、祖形が再構成されないほど変異が大きい。ピジン化の初期の段階では、非ピジン語話者にとって、メラネシア系の言語から供給された語彙は、ピジン語話者がそのつもりがなくても、意味がわからないという点において、隠語的に映ったことであろう。同様のことが、非ピジン語話者で英語を知らない人々に対しての英語から供給された語彙に対しても言えるであろう。

⁶ 阪倉によると、理論的方法によるものとして、「音節の転倒法」、「音節の省略法」、「音節の添加法」、「變讀法」、「分析法」、「外国語其他引用法」の6項目を、連想作用によるものとして、「謎的様式」と「形容的様式」の2点を挙げている(阪倉1966:22)

楳垣 (1956:472) は、「いうことを忌む気持、縁起をかつぐ気持も、隠語を生む原因の一つ」とする。筆者が収集した用例の中に、「じいさん」(夫の呼び名)、「ばあさん」(妻の呼び名)という隠語がある。これは、健常者と対等の言葉を使うことにおそれ多いという気持ちを患者ら(または回復者)が持ったことから生じたようである。たとえ、その夫妻の年齢が若くても、世間と同じような言葉使いをすること、つまりけがすことを怖れる意識があったようである。

さらに、患者(または回復者)の治療に際して、体内から浸出液が出ることがあるが、看護師は、これを「しるが出た」とは言わないよう気をつけたようである。これは患者がこの表現を嫌ったためである。したがって、患者の側からは、「突っ込み入れた」「トンネル入れた」という隠語が生まれた。このような隠語を使うことは、すなわち、「しるが出る」ことを意味するので、結果的に同じ内容を指すが、言い変えることで、自身の精神的な側面がけがされることを回避したようである。

なお、「いうことを忌む気持」が反映された現象として、トク・ピシンについては *sais* の例がそのまま当てはまる可能性があるが、*sais* の例はトク・ピシン自体の性質を示すものというより、トク・ピシンの俗語の例示と解釈することもできる。

最後に、楳垣 (1956) は、「社会集団内での特殊な生活様式、行動、体験、出来事、物の見方・考え方などが隠語を生む」とする。熊本の療養所といった限られた仲間での特殊体験から生まれた隠語は枚挙にいとまがないであろう。療養所から脱走すれば監禁室に入れられたという体験を持つ入所者は一定数存在する。つまり、多くの入所者が 40年 あるいは 50年 以上同じ療養所に入所しているところから、特殊な体験をした集団と言える。

隠語はピジン語と同じく、合理的で簡略化を図る側面があると言えよう。なぜならば、「ヴァゼクトミー」という言葉だけで、それが「男性の精管の切除手術を施し、子孫を残さないこと」を意味することができるからである。そういう意味においては、トク・ピシンの前置詞 *long* は、英語の前置詞になぞらえると、*in*, *at*, *on*, *from*, *with* などに相当する、つまり、その一語は多機能性を示すわけだが、それ一語で英語の様々な前置詞を表わすことができるという意味において、「ヴァゼクトミー」と似ている。

ピジン語は、いずれの接触集団の母語ではないという点において、第三の体系をもった言語と言えよう。実は隠語もまた、もともとその集団を構成する構成員のだれの既知情報語彙でもなかった。ピジン語と同じように、隠語が誕生した時点で、今までにはなかった、第三の新たな語彙的世界が、個々の話者に宿るのである。

ピジン語は、集団間コミュニケーションという形態をとるが、それに対して隠語は集団内コミュニケーションという形態をとる。隠語の秘匿性が高いことを示している。

ピジン語の安定性は、現在どのような外的要因を受けているかによる。それがナウル共和国のピジン英語のように、文化的・社会的機能が小さくても、1世紀以上も存続し続けている言

語もある。たしかな言語使用域 (domain) がある証拠である。一方、成立しては消えていったピジン語も数多くある。隠語もまた、ニーズがある以上、存続し続ける。やがて消える運命にある隠語もあるし、ずっと存続し続ける隠語もある。隠語のサイクルは、決して長くはないだろう。隠語もナウル共和国のピジン語とよく似ていて、それが使用される場面が限定的であればあるほど、長く存続すると思われる。多様な言語的世界を形成しているところほど、ニーズがあるかもしれない。もしナウル島のピジン英語がクレオール化したならば、その使用域も拡大し、やがてはその他の地域で浸透性も高まり、共時的な広がりを見せるかもしれない。

今回は熊本以外の療養所で調査を行えなかったが、隠語の共時的・通時的な広がりを観察するために、他の療養所でも通用する隠語があるかどうか、今後の課題とし、そこに何らかの規則性が認められるかどうか、調べることは大いに価値があるだろう。これについては別稿に譲りたい。「かごぬけ」(ある療養所を無断で抜け出し他の療養所に潜り込むこと) という隠語が存在することから、複数の療養所で暮らした経験を有する入所者もいることがわかる。その際に、隠語が伝播する可能性があるのである。今日のように、電話やファクス、さらにはインターネットを活用する時代においては、昔の言語生活と違って、隠語が伝播しやすいのかもしれない。

5. 結論

本論文では、隠語とピジン語の発達過程における比較対照を試みてきた。その結果、隠語とピジン語は、「+連帯感」、「+生産性」、「-記録性」といった意味範疇の束を有し、逆に、隠語とピジン語は、「隠匿性」の範疇によって区別されることが明らかになった。

また、楳垣の言語観とのかかわりの中で、国立療養所の入所者の中に必ずしも、「特定の社会集団に属していることを、進んで示したい、お互いに認め合い、他人からも認められたいという気持ちを強く持っている」わけではないことも指摘された。

今後の課題として、隠語の共時的展開性をさらに調査するために、他の療養所でもその実態を調べることを有益であるとされた。

参考文献

- Bickerton, Derek. (1981). *Roots of Language*. Ann Arbor: Karoma. (笈壽雄ほか訳『言語のルーツ』大修館書店 1985)
- Brown, Penelope. & Stephen C. Levinson. (1978). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (田中典子監訳『ポライトネス：言語使

- 用における、ある普遍現象』研究社)
- 江藤裕之ほか(2002)「医療者間で使われるドイツ語隠語の造語法に関する考察」『長野県看護大学紀要』4: 31-39.
- 細川弘明(1992)「ピジン・クレオール諸語」『言語学大辞典第3巻世界言語編下』三省堂, 437-466.
- 橋内武(1986)「ことばと社会」『ことばと人間：新しい言語学への試み』三省堂, 142-184.
- 樋口榮(1935)『隠語構成様式並に其語集』警察協会大阪支部
- 金田一春彦ほか(1988)『日本語百科大事典』大修館書店
- 簡月真(2002)「台湾における言語接触」『社会言語科学』4-2.
- 桐田久美子ほか(2007)「臨床現場における外来語略語隠語の使用状況と看護師の認識」『日農医誌』55-6, 610-617.
- 町田健編(2001)『日本語学のしくみ』研究社
- Mühlhäusler, Peter.(1996). *Pidgin and Creole Linguistics: expanded and revised edition*. London: University of Westminster Press.
- 西尾純二(2005)「隠語・スラング・卑罵語」真田信治/庄司博史編『事典 日本の多言語社会』岩波書店, 276-279
- 岡村徹(2008)「集団語の研究：菊池恵楓園の場合」『帝塚山学院大学研究論集』43, 103-120.
- 岡村徹(2021)「ナウル共和国のピジン英語の保持に関わる諸問題」『オーストラリア・アジア研究紀要』6, 1-10.
- 阪倉篤義(1966)『語構成の研究』角川書店
- 定延利之(2016)『コミュニケーションへの言語的接近』ひつじ書房
- 真田信治編(2006)『社会言語学の展望』くろしお出版
- 真田信治/庄司博史(2005)『事典 日本の多言語社会』岩波書店
- 柴田武(1965)『ことばの社会学』日本放送出版会
- 千田俊太郎(2022)「計画言語とピジン・クレオール」*LLO*, 13, 16-31.
- 友成亮太ほか(2006)「コミュニケーションの生態系：現代日本の若年層の言語使用を中心として」『慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション』36, 1-16.
- Todd, Loretto.(1974). *Pidgins and Creoles*. London: Routledge & Kegan Paul. (田中幸子訳『ピジン・クレオール入門』大修館書店 1986年)
- 榎垣実編(1956)『隠語辞典』東京堂
- 吉岡泰夫(2011)『コミュニケーションの社会言語学』大修館書店
- 米川明彦(2001)「位相語集団語若者語をめぐって（特集ことばの最前線）『国文解釈と教材の研究』46(12): 94-103.

資料

隠語の総合研究調査票

調査日時：令和4年4月

調査者：岡村 徹

調査地点：国立療養所菊池恵楓園（アンケートを郵送）

被験者性別：男性 女性（該当する箇所を○で囲んで下さい）

被験者年齢： 10代 20代 30代 40代 50代 60代
 70代 80代 90代（該当する箇所を○で囲んで下さい）

療養所生活：(1) 恵楓園は、入所して何年目になりますか？（ ）年

(2) 他の療養所への入所経験はございますか？（ ）

(3) それはどこですか？（ ）

特記事項：（こちらで記入します）

質問：これから隠語を21個、取り上げます。それぞれの隠語の使い方について、あなたの現在の日常生活の中でどのように使用されているか、お考えいただき、該当する箇所を○で囲んでください。

「ヴァゼクトミー」（男性の断種手術のこと）

1. よく使う 2. 耳にするが自分は使わない 3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「檜山行き」（‘檜山’は、昔園内の中にあった火葬場のことを指す）

1. よく使う 2. 耳にするが自分は使わない 3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「白うさぎ」（防護服をまとった看護婦がそのように見えたことに由来）

1. よく使う 2. 耳にするが自分は使わない 3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「つる」(清酒)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「かめ」(焼酎)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「ぜんざいをする」(結婚をする)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「のどきり三年」(のどにできた腫瘍を切除する手術を行うと三年以内に死ぬ場合が多いことから)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「かごぬけ」(ある療養所を無断で抜け出し他の療養所に潜り込むこと)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「ちょうちん」(いつも動いてバランスをとっている様)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「少年舎出」(頭でっかちで大人びた人、子どもらしさがない)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「すじ切り」(断種のこと)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「ひだり盲腸」(墮胎手術をされる婦人の病名のこと)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「お召し列車」(患者専用の列車のこと)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「草津送り」(園内の規則を犯し、群馬県草津の重監房に送られたら生きて帰れる保証がなかったことから)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「けこみ」(本妙寺あたりの人が家々をまわって寄付を集めていたことを指す。意識的、計画的に食料品をあさることも指す)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「どんぐり拾い」(男女の性関係そのものを指す)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「壮健らい」(健常者と変わらない人のこと)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「黒石」(恵楓園の別称)の豚行き」(熊本の市場では、恵楓園への納入業者たちが、悪い品物を指して、このように言っていた)

1. よく使う
2. 耳にするが自分は使わない
3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「座敷豚」

1. よく使う 2. 耳にするが自分は使わない 3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「苗床ん人」(園の近辺に暮らす人びとが恵楓園の患者を指してこのように呼んだ。細川藩の時代、この場所が苗床だった)

1. よく使う 2. 耳にするが自分は使わない 3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

「河向う」(入園患者の中の朝鮮半島出身者のこと)

1. よく使う 2. 耳にするが自分は使わない 3. 聞いたことがない
4. 昔よく使うか、耳にするかした

他に、何かご存知の隠語があればお教え下さい。(自由記述)

.....

ご協力ありがとうございました。